

## ハイデルベルク信仰問答講解説教48「新しい生活」(2012年9月2日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

わたしたちではなく、主よ／わたしたちではなく／あなたの御名こそ、栄え輝きますように／あなたの慈しみとまことによって。(詩編115:1)

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」(マタイ5:13-16)

## 【説教】

今日は、第47主日、問122のところですが。前回は主の祈りの呼びかけ「天にましますわれらの父よ」の部分でしたが、ここからは祈りそのものの部分に入ります。ご存知の方も多いと思いますが、主の祈りは全部で六つの祈りがあります。しかもそれは大きく分けて前半と後半に分けることができます。前半の三つの祈りは神さまのことに祈る祈り、後半の三つはわたしたちのことに祈る祈りになります。もちろん両者は密接に関わっておりますが、そのように分けることができます。因に十戒も二枚の石の板に記されたこととありますように、まず神さまについての戒め、そして隣人との関わりについての戒めと二つの構造を持っておりますが、これは聖書に一貫している信仰の姿勢です。つまりその姿勢とは、まず神さまとの関係の問題です。それが成り立っていないと、わたしたちの生活、隣人との関わりも成り立たないということ。また少し表現を変えて言いますと、信仰がすべての生活の土台である。第一のことである。これを無視してただ世の中のこと、生活のことというのは本来あり得ないということです。本末転倒です。

主イエスも福音書の中で、最も重要な掟は何かと問われた時に、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。隣人を自分のように愛しなさい」(マタイ22:37-39)と言われました。神さまを愛すること、隣人を愛することは共に重要ですが、しかしこの第一と第二という区分がなされていることは無視できません。この第一と第二はひっくり返すことができないのです。つまりまず隣人を愛することがあって、次に神さまを愛するということができない。信仰が先なのです。救われてこそ、人を愛することができる。

聞いた話ですが、あるアメリカの大学で、学生に十戒の戒めを全部バラバラにして、自分が大切だと思う順番に並べ替えるように求めたら、第一戒と第二戒は、一番最後になってしまったという話があります。皆さんはどうでしょうか。第一戒は神さま以外の何ものをも神としてはいけない、第二戒は刻んだ像を造ってはいけない、偶像礼拝の禁止です。そういう神さまのことは、わたしたちはあまり重要に考えていない。それよりも生活のこと、仕事のことが絶えず優先されます。信仰、教会のことは二の次です。もしわたしたちが今の生活の中でのいるなどの優先順位をつけたらどうなるでしょう。おそらく信仰は最後の方になるのではないのでしょうか。そういうことはまず生活が安定してからと多くの人は考えます。でもそこから見直さなければ、わたしたちの生活は何も変わらないでしょう。

誰でも自分のこと、生活のことは一生懸命なのです。でもそこで忘れられているのは、神さまのことです。教会も同じような問題があります。世の中のこと、人間中心になって、神さまのことが忘れられているのです。いやむしろ神さまのことをだすと、世間離れているように思われるとか、変に宗教臭くな

るから、故意に出さないという教会もあります。極端になると、教会は世の中のことを語り、社会の問題について取り組んでいればそれでいいのだという考えさえ生まれてくるのです。でもそれなら教会という看板を下ろさなければなりません。教会はどういう場所なのか。教会に託されていることは何か。この第一、第二の大原則は教会が教会であるための試金石となります。

この世界は神さまによって造られました。人間も神さまによって造られ、

神さまによって生きています。ですからまず何よりも神さまのことをしっかりと中心に据えなければ、わたしたちの生活も、この世界も崩れるしかないのです。ということは、神さまのことを第一にすることは決して人間のことを疎かにすることではない。実は、わたしたちのためでもある。神さまのための祈りは、わたしたちのための祈りでもある。わたしたちの生活が本当の意味で祝福されるための祈りなのです。

そのことは、今日の信仰問答でも教えられています。問122に注目しましょう。ここは主の祈りの第一番目の祈り、「御名をあがめさせたまえ」について教えます。「御名」というのは神さまの名ということですが、それは神さま御自身のことと理解してよいでしょう。出エジプト記にモーセが神さまの名を尋ねるところがありますが、神さまはそれに対して「わたしはある、わたしはあるという者だ」(3:14)と答えられます。神さまの場合、存在すること、それで十分なのです。固有名詞は他のものと区別するためにあるわけですが、神さまを一体他の誰と区別するのでしょうか。神さまはあるということだけで十分です。

さて、信仰問答を注意してみますと、ここも第一、第二と分かれます。第一は、まず神さまのことです。そして第二がわたしたちの生活のこと。そしてそのわたしたちの生活を成り立たせるために、第一のことがあります。それはまず「わたしたちが、あなたを正しく知る」ことだと言います。神さまを知ること。それが第一だということです。このハイデルベルク信仰問答の少し前にカルヴァンの書きました『ジュネーヴ教会信仰問答』の第一問はこういうものです。「人生の主な目的は何ですか。神を知ることであります」神さまを知る。そんなことは分かっている。でもそうでしょうか。しかも信仰問答は「正しく知る」と言います。間違っていて知っていても意味が無いのです。正しく知ること。そうでなければ、わたしたちは神さまをあがめることができないのです。

では、正しく知るとはどういうことでしょうか。知識として知ることでしょうか。信仰問答には「あなたを聖なるお方とし、あがめ、讚美できるようにさせてください」とあります。「あがめる」という言葉は、元の言葉では「聖とする」という言葉です。神さまを聖なるお方とする。例えば聖書では「聖別する」という言葉があります。十戒の第四戒は、安息日を聖別するこ

とです。それは特別にすること。他と一緒にしない。そういう神さまとそうではないものの境をはっきりさせる。そのことがまず神さまを正しく知るこの意味です。わきまえると言ってもよいでしょう。

ところが、この境がぼやけてしまう。つまり神さまと神さまに造られたものが一緒になってしまうところにわたしたちの罪の現実があります。創世記三章のアダムとエバの墮罪は、人間が神さまのように善悪の判断の基準になるというものでした。神さまのように賢くなろうとしたのです。それはそこで人間がこの境を越えようとしたことです。それが人間の罪です。この罪によって人間はもはや神さまをあがめることができなくなってしまいました。神さまをあがめることよりも、自分をあがめることへ心が向かってしまう。造り主を忘れ、自分勝手に生きようとする人間の罪の歩みがそこから始まりました。それは先ほどから言うように、神さまのことよりも自分のことを絶えず優先させるわたしたちの生活を考えてみれば一目瞭然です。だからこそわたしたちはこの祈りを真剣に祈らなければなりません。

今日は詩編115編を読みました。「わたしたちではなく、主よ、わたしたちではなく、あなたの御名こそ、栄え輝きますように」これはまさにわたしではなく、あなたを、神さまを第一とさせてくださいという祈りです。この祈りにも表されているように、わたしたちは神さまを崇めることが難しいのです。それよりもわたしの名を輝かせようとする。だから「わたしたちではなく」と繰り返します。でもそれはわたしたちが努めて御名をあがめるようにするのでしょうか。

「あなたの慈しみとまことによって」とあります。それは神さまの慈しみとまことによってそうなる。神さまの御名がわたしたちの間で輝くようになるのは、わたしたちの努力ではなく、神さまの御業によるということです。今日の信仰問答でも「あなたの全能、知恵、善、正義、慈愛、真理を照らし出す、そのすべての御業において」とあります。神さまの御業によって、わたしたちは神さまを知り、神さまをあがめるようにさせられるのです。

その神さまの御業は、イエス・キリストの出来事に集中していると言ってもよいでしょう。ヨハネ福音書に「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」(1:18)つまりイエス・キリストが神さまを示された。このキリストを通してわたしたちは神さまを知るのです。まさにイエス・キリストにおいて、神さまの全能、知恵、善、正義、慈愛、真理が現されています。十字架と復活による罪からの救いに、神さまの全能、知恵、愛すべてが込められている。このキリストの御業にあずかった者は、体験的に神さまを知ることになります。そのすべてに触れるのです。だからもはや自分のためではなく、神さまのために、その御名の栄光のために生きる生活へと向かいます。

その生活のことが次の第二のところで言われます。「あなたの御名がわたしたちのゆえに汚されることなく」とあります。神さまよりも絶えず自分のことを優先させるわたしたちの罪によって、神さまの御名は汚されておりました。わたしたちは神さまの顔に泥を塗るようなことをしていたのです。しかしイエス・キリストの救いによって、神さまの愛を知ったわたしたちは、今度は自分の生活のすべてにおいて、つまりわたしたちの思い、言葉、行いによって、神さまを愛するように、神さまの御名をあがめるように新しくされていきます。

でも、改めてここで驚くことは、神さまは御自身の名をわたしたちに託されていることです。こんなにも危なっかしいわたしたちに、その思いと言葉と行いのすべてが、神さまに泥を塗るようなわたしたちに、その名を託し、その名を呼ぶことを許し、そのわたしたちの生活で神さまをあがめ、讃美するようにしてくださっている。これは驚くべきことではないでしょうか。それは神さまがそれだけわたしたちを信頼してくださっているということではないでしょうか。この信頼に応える生活こそ、

わたしたちのキリスト者としての責任ある生活になります。

神さまは独り子イエス・キリストをわたしたちに与えてくださいました。このキリストの御業によって罪赦されたわたしたちは神さまをあがめることができるようにされています。そのようにわたしたちの生活は既に神さまによって新しくされたのです。今日はマタイ福音書の「地の塩、世の光」のところを読みました。16節を読みましょう。もちろんわたしたちの中に光があるのではなく、キリストのゆえに、神さまの名を呼び、崇めることができる。そこでわたしたちは輝くのです。そしてその輝きがわたしたちの周りにも及ぶのです。キリストに結ばれることで、その生活のすべてが神さまをあがめるものとして用いられるのです。その責任と自覚を今日、ここにもう一度新しくしたいと思います。

今日は、総員礼拝ですが、昔は「振起日」と言いました。信仰を奮い起こす時です。キリストによって、御名を崇める新しい生活が始まっています。神さまはその名を託し、わたしたちの生活でその名を輝かせることを求めておられます。神さまの栄光を照らし出す歩みへと前進していきましょう。祈りをささげます。